

# 愛知・名古屋2026アジアパラ競技大会スローガン・エンブレム選定委員一覧

## 選定委員長



廣村 正彰 グラフィックデザイナー 廣村デザイン事務所 代表取締役

1954年愛知県生まれ。田中一光デザイン室を経て、1988年廣村デザイン事務所設立。グラフィックデザインを中心に、美術館や商業、教育施設などのCI、VI計画、サインデザインを手がけている。主な仕事に、日本科学未来館、すみだ水族館、9hナインアワーズ、アーティゾン美術館、石川県立図書館、名古屋造形大学、LOFTのアートディレクション、東京2020スポーツピクトグラム開発、WDO世界デザイン会議東京2023など。主な受賞歴に、毎日デザイン賞、KU/KAN賞、SDA大賞、グッドデザイン金賞、DSA大賞ほか。著作『デザインからデザインまで』(ADP)他。

### 【メッセージ】

決定案は、パラアスリートの競技にかける熱い想い、躍動感、そして協調と調和も想起させます。このシンボルとスローガンが私たちを結びつけ、アジア・アジアパラ競技大会を通して、誰もがパラスポーツ競技の魅力を共有できることを期待しています。

## 選定委員



伊藤 豊嗣 グラフィックデザイナー 名古屋造形大学 学長

1958年三重県生まれ。1981年三重大学教育学部美術科卒業。1984年デザイン事務所設立。主な受賞歴に、公益財団法人日本グラフィックデザイン協会(JAGDA)ポスター大賞1993、JAGDA新人賞1994、第15回ワルシャワ国際ポスタービエンナーレ1996銅賞(ポーランド)、平成14年度名古屋市芸術奨励賞、上海万博(2010)・国際ポスターコンペティション名誉賞、第62回全日本広告連盟名古屋大会(2014)シンボルマークコンペ採用、Poster Stellars 2022 第2回国際ポスターコンペティション Political部門銅賞(アメリカ)他。

### 【メッセージ】

この大会にけるアスリート、関係者、観客の熱い気持ちがひとつになることを炎で力強く表現しているエンブレムとアジア大会との一体感の想いをこめたスローガンの連動でアジアパラ大会が盛り上がることを期待したいです。



田口 亜希 公益財団法人日本財団パラスポーツサポートセンター 推進戦略部ディレクター

パラリンピック射撃元日本代表。アテネ、北京、ロンドンと3大会連続でパラリンピックに出場。アテネでは7位、北京では8位に入賞。2016年オリンピック・パラリンピック招致活動では最終プレゼンターを務め、また2020年オリンピック・パラリンピック招致における国際オリンピック委員会(IOC)評価委員会ではプレゼンテーションを行なった。東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会では、聖火リレー公式アンバサダー、選手村副村長としても大会を盛り上げた。日本パラリンピック委員会運営委員、日本オリンピック委員会理事も務める。

### 【メッセージ】

スローガンをもとに愛知・名古屋アジアパラ競技大会がアスリートや関わる多くの方々そして観客の皆様の想いを一つにし盛り上がることを期待しています。そして生み出されたレガシーが2026年以降も続き、そのポジティブな記憶を想起させるエンブレムとなると思います。



田中 里沙 事業構想大学院大学学長

広報・広告・マーケティングの専門誌「宣伝会議」の編集長、取締役編集室長を経て、2016年に地方創生と新規事業の研究と人材育成を行う、学校法人先端教育機構「事業構想大学院大学」(名古屋校はJRゲートタワー27階)学長に就任。企業や自治体、他大学との連携による新事業、イノベーション、地域ブランディング等を企画し、推進する。「クールビズ」「育業」ネーミング、東京2020エンブレム、大阪・関西万博キャラクター、G7広島サミットロゴ等の審査員、政府広報アドバイザーのほか、審議会委員を務める。三重大学理事(広報・ブランディング担当)

### 【メッセージ】

全ての人が力を出し合い、楽しみながらチャレンジをしていく際の原動力になるエンブレムとスローガンを選出することができました。親しみ、愛し、活用していただけたら嬉しいです。希望を胸に、共に進んでいけますよう祈念しております。

## 選定委員



大島 健吾（陸上）名古屋学院大学AC 所属

愛知県瀬戸市出身。生まれつき左足首から先が欠損。高校時代はラグビー部に所属し日常生活用の義足でプレー。高校2年次、パラアスリート発掘イベントで競技用義足を体験したことがきっかけで、大学入学後に陸上競技を始める。2020年、2021年とアジア新記録を更新し、2021年東京パラでは混合4×100mユニバーサルリレーで銅メダルを獲得。

### 【メッセージ】

色々な人の色々な意見や考え方を聞き、知り、考えたうえで、今回のスローガンとエンブレムは伝えやすくわかりやすいものを選定できたと思っています。これが愛知・名古屋で開催されるアジアパラのスローガンとエンブレムの正解だと、僕は感じています。



加治 良美（カヌー）NTP名古屋トヨペット株式会社 所属

愛知県岡崎市出身。中学2年生の時に交通事故で両足を切断し、その後、リハビリの医師に紹介されて車いすマラソンに取り組む。34歳の時にカヌーの関係者に誘われて競技を始め、2019世界選手権、2021東京パラ、2023杭州アジアパラにも出場を果たした。

### 【メッセージ】

選定に迷ったとき、指標になったのは他の皆さんの意見でした。色々な経験をされた方々だからこそ、自分ひとりでは気が付かないことや考え方の広がりを感じることができ、今後の自分の参考になることが多かったです。このスローガンとエンブレムが世にでたときにきっとこの時のことを思い出すとおもいます。



小山 紘奈（卓球）あいちトップアスリートアカデミー / 株式会社東海理化

愛知県みよし市出身。小学3年生の時に知的障害及び発達障害（アスペルガー症候群）が判明。小学6年生の時に、元選手であり現クラブチームの代表でもある父の影響で卓球を始める。2018年第18回全国障害者スポーツ大会で金メダルを獲得、その他東海障害者卓球大会3連覇などの実績をもつ。現在、あいちトップアスリートアカデミーパラアスリート部門アカデミー3期生として活動中。

### 【メッセージ】

自分の推しの案と違ったり商標など難しいことも多かったですが、最後にはみんなの想いが反映されたものになったと思います。自分の意見を伝えたり他の方の意見を聞くことができたことは、私にとってとても貴重な経験となりました。私を委員に推薦してくださった方々、サポートしてくださった方々に感謝いたします。



佐藤 圭一（トライアスロン・バイアスロン・クロスカントリースキー）

株式会社セールスフォース・ジャパン 所属

愛知県名古屋市出身。先天性形成不全による左手関節部欠損の障害を持って誕生。長野パラリンピックで日本人選手の活躍を観て、自身も競技者として歩む決意。2005年5月に1年間単身カナダへ。帰国後は数々の大会で経験と実績を積み、2010バンクーバー・2014ソチ・2018平昌・2022北京パラリンピック出場も果たした。

### 【メッセージ】

選定委員みんなで、こころをひとつにして決めることができました。パラアスリートの燃えるような熱い想いと、周りの方のサポートがあって、誰もがこころをひとつにできる。そんな大会になることを願っています。



廣瀬 誠（柔道）愛知県立名古屋盲学校

愛知県西尾市出身。高校生の時、病気で視覚障がいとなる。組んでしまえば障がい前と同じようにできる好きだった柔道が当初の心の支えとなった。アテネ、北京、ロンドン、リオのパラリンピック4大会出場。「障がいは不便だけど、不幸じゃない」ことをその姿で子供にみせたいという思いで最後のリオに臨み、アテネ以来となる銀メダルを獲得し引退。障がいは失うものだけでなく、得られるものも大きいと感じ、教職の傍ら、パラスポーツの普及・啓発、障がい理解促進の活動を行っている。

### 【メッセージ】

決定案以外にも素晴らしい案があり、意見が別れることもありましたが、最後に選定委員の総意として決まったのが、このスローガンとエンブレムです。このシンボルが多くの皆さんに届き、大会を成功に導いてくれることを願っています。